

氏 名	安 田 傑
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（教育心理学）
学 位 記 番 号	甲文第123号（文部科学省への報告番号甲第416号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年3月2日
学 位 論 文 題 目	ロールシャッハ色彩反応の基礎的研究
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 中 澤 清 （副査） 教 授 浮 田 潤 最 上 多美子（鳥取大学大学院教授）

論 文 内 容 の 要 旨

安田傑氏の博士学位申請論文「ロールシャッハ色彩反応の基礎的研究」はヘルマン・ロールシャッハが1921年にその心理検査を公表した当初から情動指標として考えられてきた色彩反応の意味について論じたものである。ロールシャッハテストは10枚のインクプロットに対する回答を分析することによってパーソナリティを知ろうとする。回答から得られたスコアの内、決定因と呼ばれるスコアリング要素の一つに色彩反応があり、それは明確な形態因を持つ色彩反応（形態色彩反応：FC）と不定形の形態因を有する色彩反応（色彩形態反応：CF）と形態性が関与しない色彩反応（純粹色彩反応：C）に分類される。色彩に関する反応がこのように分類されるのは、発達のな変化に基づく仮説によるのだが、その仮説に関する証明はなされずにきた。安田氏はロールシャッハテストの色と形態に関する問題に焦点を当て、先駆的な方法により実証データを得、明らかにしている。

本論文は6章から構成されているが、主要な研究は10編の研究からできあがっている。まず第Ⅰ章ではロールシャッハテストについて概観した後、その上でウッドらのロールシャッハテストへの批判を受けて、検査の客観性は検査者の主観的分析に基づくものであり、客観的な知覚・認知研究の必要性を指摘している。そして色彩反応の解釈仮説に論点を移し、量的な研究を行うことによって、色彩反応は情動を反映している、情動性は色彩知覚を促進し、形態知覚を妨害する、情動性は形態を利用する時間を与えないという仮説を証明できるとした。

第Ⅱ章では、ロールシャッハテストの研究はなによりも、ロールシャッハテストにおいて評定者信頼性があることを検証して始めて行われるとして、以降の研究の前提となる事柄について行った。55冊の出版物に見られるロールシャッハテスト・プロトコルをテキストマイニングにかけ、色彩反応とスコアリングされた言語表現を要素に分け、色彩表現に関わるキーワードを抽出した。このキーワードを検証した結果、評定者間信頼性は充分であり、これらは色彩反応以外の反応に用いられることが少なく、評定者がこれらの言葉に注意することによって評定者信頼性が高まることがわかった。さらに図版回転が色彩反応産出を促すかという命題について、図版回転の有無は色彩反応に影響しないという結果が得られた。色彩反応に限っては図版回転の影響を受けないことにより色彩反応が図版回転から独立して検討しうることが明らかになり、次の妥当性研究に耐えうる信頼性を有していることを示した。

第Ⅲ章では知覚者が刺激の類似性を判断する際、色と形のどちらに影響されるかという色・形問題を論じている。以前から物の類似性を判断する時に色と形のどちらを利用するかという一次元的問題として論じら

れ、人は発達途上で色優位から形優位の知覚に変化していくと考えられてきた。安田氏は一次元モデルではなく、色彩をどれくらい、形態をどれくらい利用するかという2次元の見地に注目し、2次元重回帰モデルを提唱した。この新しい観点からロールシャッハテストの色彩反応が形態にどれくらい影響され、色彩からどれくらい影響されるかという問題に焦点を当てている。これは人が図形の類似を判断する際に、色彩類似優位の判断が色彩利用性となり、形態類似優位が形態利用性というモデルである。

第Ⅳ章では2次元重回帰モデルに基づいた3-SETという評定法を考案し、客観性を与えて色彩と形態を含む刺激に対し形態利用性と色彩利用性を測定できるようにした。そしてパーソナリティ検査（NEO-PI-R）との比較では、マルチレベルSEM分析法により妥当なモデルを提唱した。NEOの一尺度である開放性の高い人は色彩利用性が高いことを示し、自由な発想や創造性が色彩を受容していることがわかった。さらにNEOの30の下位尺度との検討では、衝動性や達成欲求が高いほど形態利用性が低くなり、欲求統制が困難な者には形に目が行かないという結果が出た。

第Ⅴ章では、本論文の最重要課題である3-SETによってロールシャッハテストの色彩反応の意味を明らかにしようとした。これまで仮説としてしか扱われていなかった色彩反応を、衝動性と関係しているものとして捉え、マルチレベル共分散構造分析（マルチレベルSEM）によって明らかにした。その結果、衝動性は形態利用性を低めると同時にロールシャッハテストの色彩反応の内、CFとCに影響していることが証明された。しかし形態利用性が高いと考えられる形態色彩反応に対しては関係が見られなかった。ロールシャッハテストの刺激価は色彩利用性を促進するのではなく、形態利用性が情動制御に関係していると結論づけた。衝動性のみに焦点を当て、さらに初発反応時間を組み込んだモデル分析では、最終的に有彩色図版初発反応時間の遅延はFCのみに影響を与えていることがわかった。衝動性の高い人はCFとCが多いという、以前から知られている解釈仮説に合致する結果が得られた。また色彩に関心を寄せる人が色彩反応を多く産出するというということではないという新知見も得られた。

第Ⅵ章は総合考察で10の研究で得られた知見について討議している。仮説に立てた情動性は色彩知覚を促進するという仮説は否定された。情動性は色彩知覚を促進し、形態知覚を妨害するという仮説は、衝動性は形態利用性を阻害し、その結果CFとCの産出を促進した。また形を利用するには時間を要することもわかった。情動性の高い人は色彩反応を産出しやすいというこれまでの常識に対し、色彩刺激は反応産出に対してノイズとして作用していると推測できた。

論文審査結果の要旨

本論文は安田傑氏が卒業論文として手がけてきたテーマ、ロールシャッハテストの基礎的研究が端緒となり、修士論文を含め一貫して実験的手法によって緻密に行ってきた研究の集大成である。臨床場面ではロールシャッハを初めとする投影法検査の解釈仮説を何の疑いもなく利用している。しかし研究者はその一つ一つを吟味することが重要であると思いつつ、その手間のかかる作業を嫌い、目をつぶってきた。またロールシャッハテストの実施には時間を必要とするが、それを厭わず、十分な被験者数を集め、有意義な結果を出している。色彩反応に限ったとはいえ、本論文では安田氏は一つ一つ吟味しながら進めたことがよくわかる。さらに論文にあらわしにくい故に利用をためらうマルチレベルSEMという分析法を武器に、複雑な関係性を調べるために多くのモデルを構築して吟味を行った。それ故この論文がロールシャッハテスト領域における第一級の研究として評価できるのである。

ロールシャッハテスト反応の受け止め方について、安田氏がロールシャッハ法と呼んだ多くの研究者の方法を概観し、充分理解した上でロールシャッハテストの色彩反応問題点を明らかにした。そして色彩反応が色彩だけではなく、形態利用の問題であることを洞察し、知覚・認知研究に突き進んだ。

そして信頼性が得られて始めて求める研究ができるとの考えからテキストマイニングにより色彩利用キーワードを抽出している。このことは評定者のスコアリングの一貫性を高めることに役立ち、質疑に正確さが生まれることを示している。また図版回転は生産性を高めるという常識に対して、色彩反応に限っては図版回転の影響を受けないことを証明し、色彩反応が次の妥当性研究に耐えうる信頼性を有していることを示した。

本論文の中心的問題は3-SET という全く新しい道具によって可能となった。ランダムに作り出した色と形の組み合わせ図形の類似性を評価させることによって、色か形かという次元から、色次元、形次元という2次元からアプローチすることを可能にした。この刺激に対する類似性評価から利用性を推測したモデルによってパーソナリティとの関係を比べることが可能になったといえる。つまり服を選ぶ時色で選ぶ人、デザインで選ぶ人といった単純な分け方ではなく、人は色もデザインも見た上で服を選び、両者のバランスにパーソナリティが反映するということである。

3-SET によるロールシャッハテストの色彩反応との検討の結果、衝動性は形態利用性を障害し、そのため形態性が低いCFやCが生じることが示された。形態利用が低くなるのは時間をかけて刺激を受け止めることができないためだという仮説を証明できたのも3-SET という道具とマルチレベル SEM による推計の結果であり、2つがそろってできたこの研究といえる。

しかし本研究に対して批判がないわけではない。ロールシャッハテストの有機的な刺激に対し3-SET の刺激価は無機的であり、同じ形態刺激、色彩刺激と見なしてよいか検討を要する。考察に形態利用性が高いはずのFCが形態利用性と関係がなかった理由にあげているように安田氏もこの点には気づいている。また色彩反応についてFCとCFを対象とするならともかく、形態性を有しないCを取り込んでいることも問題であろう。つまりCは形態利用性を全く有しない反応であるから、1次元的な問題が入ってくるはずである。また考察で濃淡のある反応にまで言及されているが、それならばこの論文の中で明らかにしておく必要であったであろう。

些末なことであるが、表現に軽重があること、3-SET の作成手順など丁寧過ぎるほど詳細に説明されている箇所と、当たり前すぎるからなのか、あっさりと論じた箇所との説明の差が大きいことがあげられる。またⅢ章の最後に次のⅣ章の目的があり、一つの章にまとめる必要があるなど章立ての問題も見られる。

これらの点は2012年1月17日に開かれた口頭試問でも指摘されたが、本論文が色彩と形態に関して3-SET という方法を用い、十分なデータを収集し手間のかかるデータマイニング分析や難解なマルチレベル SEM を用いて進められた一連の研究は意義深い。またこのような方法が臨床研究一辺倒のロールシャッハテスト研究に多くの示唆を与えることになるであろう。安田氏の今後の研究の方向性を巡っても意見交換がなされた。

審査委員3名は論文を慎重に審査し、2012年1月17日に口頭試問を行った。その結果や学会における諸活動から安田傑氏が博士(教育心理学)の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達したのでここに報告する。